

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 174 回 ゼロトレランス～「いじめ」対策の一手法？

2006.11.5

「いじめ」の問題が随分辛辣な状況になっているようである。毎日のようにテレビで報道され、そのほとんどが学校や、教育委員会、先生に問題在り...との論調で賑やかな限りである。実はそんな簡単な問題ではないと、誰もが思っているだろう。どうしたらいいのだろうか？と質すと、誰一人有効な手法を見出せないでいる。

「ゼロトレランス」(zero tolerance)という言葉、ご存知だろうか。クリントン大統領時代、ニューヨークの「割れ窓理論」に依拠して 1990 年代にアメリカで始まった教育方針の一つ。「zero」「tolerance (寛容)」の文字通り、生徒の自主性に任せる放任主義ではなく、不寛容を是とし細部まで罰則を定め、それに違反した場合は厳密に処分を行う方式。日本語では「不寛容方式」「毅然とした対応方式」などと意識される。

アメリカでは 1970 年代から学級崩壊が深刻化し、学校構内での銃の持込みや発砲事件、薬物汚染、飲酒、暴力、いじめ、性行為、学力低下や教師への反抗などの諸問題を生じた。その建て直しのための生徒指導上の様々な施策が行われてきたが、その中で最も実効の上がった方法がゼロトレランス方式だった。細部にわたり罰則を定め、違反した場合は速やかに例外なく厳密に罰を与えることで生徒自身の持つ責任を自覚させ、改善が見られない場合はオルタナティブスクール(問題児を集める教育施設)への転校や退学処分を科し善良な生徒の教育環境を保護。また「駄目なものは駄目」と教えることで、規則そのものや教師に対し尊敬の念を持たせ、ひいては国家や伝統に対する敬意や勸善懲悪の教えを学ばせ、ある程度の成功実績を挙げている。

「いじめ」は悪いこと、犯罪である、これを大前提として、いかなる理由があろうとも、いじめに関わったものは双方とも厳格に処罰する。とにかく「いじめ」に関わった人は、理由の如何問わず、罰せられる、大昔日本にもあった「問答無用」と似た制度と言っても過言でない。いじめをする方もされる方も、どちらにも言い分はあろう。双方の理由を聴いて、何がいけなかったのかよく検討して...そんな手順を一切踏まず、悪いのは「いじめ」そのものであることを明確に認知させ、処罰を制度的にシンプルに考えた方式と言える。

当然、アメリカの事情と我国の教育現場の違いは、歴然としたものがある。しかし、学校の中がここまで荒廃し、画期的解決策が見出せないでいるとすれば、日本式「ゼロトレランス」も、十分検討の余地はあると考えている。実は「いじめ」は昔から存在した。大人の社会と同じように、いい奴もいれば悪い奴もいる。学校の中だけが特別な「聖域」と考える方が無理。何とかして「いじめ」を無くそうという論理的理想論より、寧ろ「いじめ」があるのを前提にした対策こそ、現実的であると考えてるのは間違っているだろうか？だって、現実の社会は、競争といじめ(?)を勝ち抜かなければ生きていけないのだから。